

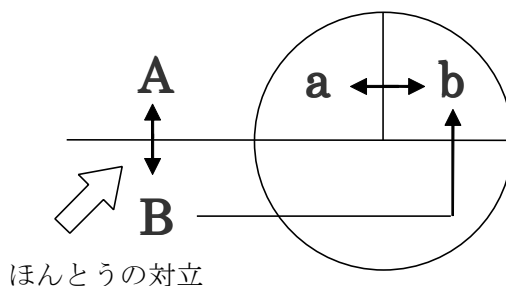
[近代] の支配が進行していく渦中の「足掻き = じたばた」

[近代] への抵抗について(マコンドはさらなる近代化、鉄道、アメリカのバナナ会社)

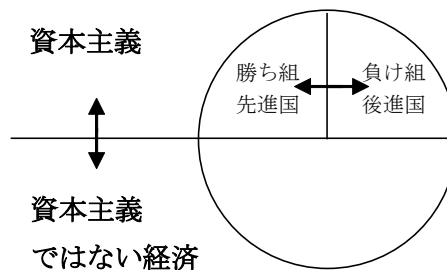
すり替えられた対立

この時点で、Bはbとして、Aの土俵に載せられてしまっている。

さらに抽象化すると…



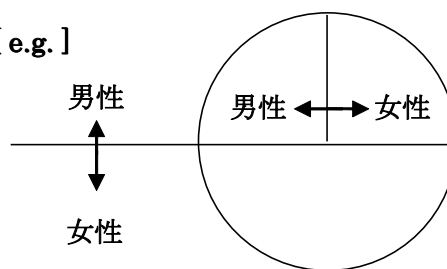
[e.g.]



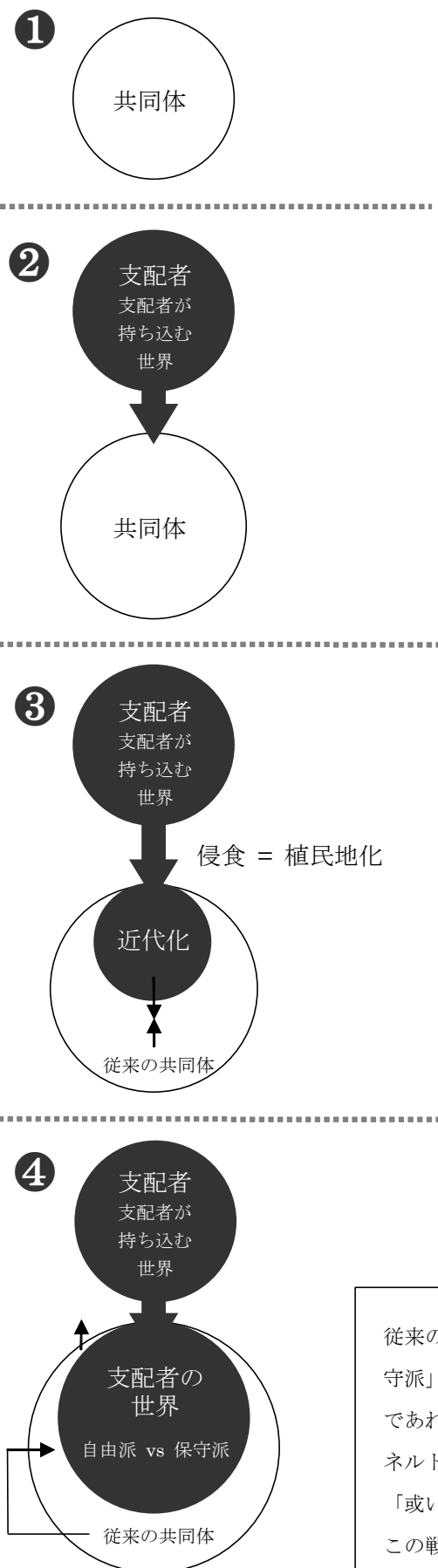
ゆえに、斎藤幸平は[脱成長] という。

格差を生み出す仕組み「資本主義」それ自体を批判しなければ、問題のほんとうの解決にはならない。

[e.g.]



そして女性たちは、男性によって男性のためにつくられた枠組みのなかに放り込まれた。男性のニーズに合わせてつくられた労働市場で自分の価値を証明しなくてはならない。(『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か?』)

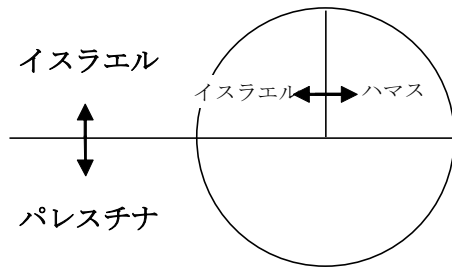


従来の共同体の抵抗は、支配者の世界の組上にあげられてしまい、「自由派」と「保守派」という戦いにすり替わってしまう！

であればこそ、アウレリャーノ・ブエンディアーア大佐は、そのことに気付き、ヘリネルド・マルケス大佐に云う。

「或いはきみのように誰にとっても何の意味もないもののために戦うよりは」
この戦いは、じつは支配者の世界で詭えられたものだ。

【e.g.】



先月10月に起こって、現在もつづく、イスラエルとハマスの衝突。
むしろ、イスラエルの思うつぼとなってしまった。

【 まとめ 】

『右のほほを打たれたら、左の頬をも差し出せ』

右のほほを打たれ、これに対して打ち返したら同じことをしたことになる。

それは同じ土俵にあがることだ。仕返し。ガンディー(1869-1948)は、非暴力、不服従という。

したがって、植民地(や、被支配者)の文学に見出したいのは、支配を蒙るのだけれども、支配者とはちがうやり方で、(とというのは、支配者と同じやり方では、問題が解決されえないことを被支配者として、身をもって承知しているから)支配を乗り越える方途だといえる。これは大変分が悪い戦いだ。

ほんとうの対立を自覚するのは、とても困難。

自覚というのは、次のようなものだ。

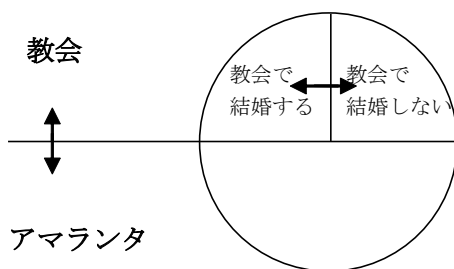
「私たち被支配者の抵抗は、じつはすでに支配者の手によって、あらかじめ筋書きが描かれていたものなのだ」
ゆえにガルシア・マルケスの願いは、「自分たちのほんとうの言葉を持ってほしい」ということではなかったかと思う。

すると、この物語の最期の仕掛けは、「ほんとうの言葉を持ってほしい」ということの出立点となる、ガルシア・マルケスの願いが込められたラストになっているものと読むことができる。

『百年の孤独』の「百年」とは、ヨーロッパという支配者の暦の分類、「一世紀」が適用されているといえ、そして、「孤独」とは、植民地の、いわば強いられた一人相撲のことにように読めてくるのではないか。

【 おまけ 】

アマランタのかたくなさについて（教会の神前結婚という形式を介さなくとも、愛は為しうる
なぜ、神に誓わせようとするのか、婚姻届が必要なのか?）



死んでもあなたと結婚なんか

しないわよ

ニカノール神父

自分の信仰が心配になったときに、教会の工事を進捗
させることにひたすら精力をかたむけた。